

潤一郎は、義妹が好きになってデートなどしてうまくいっていたが、結婚となるとあっさりふられたので妻千代を手放すことをやめざるをえない。

そこで、「佐藤よ、悪いがこの話はなかったことにしてくれ」

「何だと！男の約束じゃなかったのか！」

「まあ、しょうがない気が変わったんだ。白紙に戻してくれ。頼む」

「ふざけるな、潤一郎！」

「自分から約束をしておいて、いまさら何だ。お前とは、今日限り絶交だ！」

「結構だ。どうしても勝手にするがいい！」

---

このとき創ったのが「秋刀魚の歌」佐藤春夫29歳、谷崎千代24歳であった。

春夫は、新たな別の女性と結婚するが、やがて、この二人も別れることになる。

彼は、千代への熱い想いを忘れることが出来ず、いつまでも大切にしていた。

5年の月日がながれるのだが、長い「絶交」も「友好」に変わるのである、

絶交後時は流れ、佐藤春夫と谷崎潤一郎は和解した。

昭和5年、潤一郎は44歳で千代夫人と正式に離婚した。

「あの時はすまなかったな」

「何言ってるんだ、いまさら・・・！」

「すまなかった。悪かった。千代のこと、いまどう思ってる？」

「俺か、俺の気持は、今だってちっとも変わっちゃいない。

「そうか。そうなんだな」

「だったらどうなんだ」

「あいつをお前に譲る。もらってくれるか」

「それは本当か？今になって何だって？」

「千代をもらってくれ。今度こそ本当だ」

「本当なんだな。で、千代さんは何と言ってるんだ？」

「あいつも同じ気持ちだ。間違いない。俺も確かめた」

「そうか。・・・そうなのか」

「俺とお前と千代の三人の連名で、挨拶状を書こう。どうだ」

---

この三人連名の挨拶状を、早速大新聞が報じたものだからたちまち社会に大きなセンセーションとなったという。

さんま 和解 Hidekuro .

# さんまの歌---佐藤春夫

あはれ

秋風よ

情（こころ）あらば伝えてよ

----男ありて

今日の夕餉（ゆうげ）に ひとり

さんまを食らいて

思いにふける と

さんま、さんま

そが上に青き蜜柑の酸（す）をしたたらせて

さんまを食うはその男がふる里のならひなり。

そのならひをあやしみなつかしみて女は

いくたびか青き蜜柑をもぎて夕餉にむかいけむ。

あはれ、人に捨てられんとする人妻と

妻に背かれたる男と食卓にむかへば、

愛うすき父を持ちし女の児は

小さき箸をあやつりなやみつつ

父ならぬ男にさんまの腸（はらわた）をくれむと言

ふにあらずや

さんま、さんま

さんま苦いか塩っぱいか。

そが上に熱き涙をしたたらせて

さんまを食うはいずこの里のならひぞや。

あはれ

げにそは間はまほしくをかし。

